

# 縄文時代中期中葉における浅鉢形土器

—阿玉台式土器に伴う浅鉢の様相—

井出浩正

はじめに

縄文時代中期の土器研究において、その編年学的研究および分布論研究の軸は、これまで深鉢形土器（以下深鉢と略記）を対象とする型式学的研究によってなされてきたといえる。その背景には、当該期において、最も装飾的文様が施されたのが深鉢であり、その系統学的検討によって、年代差と地域差のまとまりを示すことができるからであつた。また、当時の社会において、最も一般的に製作されたのが深鉢であり、数量的な比較に適していることにもよるだろう。

しかしながら、縄文時代中期には、深鉢以外にも、浅鉢

縄文時代中期中葉における浅鉢形土器

形や甕形、小形の土器などさまざまなバリエーションがある。また、勝坂式土器のように多様な器形を生み出す土器型式もあり、当該期には土器型式ごとに多様なあり方が想定される。一方、上記の研究背景からすれば、従来の土器研究の主体が深鉢にあり、一部の器形を除くと必ずしも十分な検討がなされぬまま今日に至っている。浅鉢を題材とする論考はこれまでに数例あるが（佐藤二〇〇一、山口二〇〇一、中山二〇〇五、松島・山口二〇〇六など）、深鉢の研究に比べると概して少ないといわざるをえない。

そこで本稿では、これまで積極的には扱われることの少なかつた、縄文時代中期中葉段階における、阿玉台式土器に伴う浅鉢形土器の様相を把握し、当該期の土器に関する総合的研究の一端としたい。

## 1. 問題の所在

阿玉台氏土器は縄文時代中期中葉に属する土器群である。その分布は現利根川下流域を中心とする霞ヶ浦一帯に及ぶが、南東北から関東地方全域、そして中部高地にまで広範に分布する。特に中部高地から関東地方南西部に中心的な分布を有する勝坂式土器とは共伴する事例が古くから指摘されており、土器や集団間の交流を窺わせる例として挙げられる。

本学西村正衛教授による一九五〇年代から一九八〇年代初頭の利根川下流域における一連の発掘調査とその研究成果によって、阿玉台式土器は、阿玉台I a式、I b式、II式、III式、IV式と5段階の時期変遷を辿ることが判明している。その後多くの事例が増えた昨今においても、西村教授の編年大綱（以下西村編年と略記）に大きな齟齬はないといえるだろう。

西村編年は、『学術研究』誌上の発掘調査報告に基づき、『文学研究科紀要』において具体的成果「阿玉台式土器編年の研究の概要」が提示されている（西村一九七二年）。また、その後の集約的研究成果として『石器時代における利根川下流域の研究』がまとめられたが、その中に「阿玉

台式土器の編年」として所収されている。これらの論考では、阿玉台式土器の各期の概要が写真資料とともに解説されているため、型式学的特徴を把握するうえで理解しやすい。そこで本節ではこれらの一連の研究において、阿玉台式土器の研究に浅鉢がどのように記載されていたかを概観することとしたい。なお、「阿玉台式土器編年の研究の概要」および「阿玉台式土器の編年」では型式名ではなく、「類」名で表記されている。ここではその指摘に則り記載する。

阿玉台I a類は器形として深鉢、鉢、かめ形、浅鉢が伴うという指摘があり、浅鉢に関する写真資料の明示はないが、「口辺直口の深鉢や浅鉢。」という記載がある。阿玉台I b類は器形が深鉢、鉢、小形の鉢、コップ形の土器が伴うという指摘があるものの、写真資料とともに浅鉢の明瞭な記載は認められない。阿玉台II類は器形として深鉢、かめ形、鉢形や浅鉢の指摘がある。浅鉢については、「口縁をすこし外反させたり、口辺を立てた鉢や浅鉢が存在したと考えられる」とある。写真資料による指摘は認められないが、当該土器を示した図版（西村一九七二論文中の第6図）中に浅鉢と考えられる土器の口縁部破片が認められる（同第6図15）。本例は三郎作貝塚報文中に「ベンガラが塗布された浅鉢」として記載された口縁部破片と思われる。

写真資料中に当該土器のみ外面と内面が示されている。阿玉台皿類は、深鉢の記載が中心であるが、「口縁を外反させた無文の浅鉢等が伴っていたようだ」とあるものの、写真資料の図示は認められない。なお、阿玉台Ⅳ類は明確な浅鉢の記載も写真資料も認められない。

このように、西村編年における浅鉢の記載は出土した土器の制約もあり、記載が部分的であることが分かる。そのため、西村編年以降、各地の発掘調査事例によって阿玉台式土器が蓄積されるに至っても、深鉢以外の土器群への積極的な報告や言及が少ない状況にあるといえる。また、中期中葉段階の浅鉢の特徴として、概して異なる型式間において広く共通的に分布し、また深鉢に比べると時間軸上においても型式学的変遷が緩やかであることから、各地の編年体系に積極的に組み込まれてこなかったという研究背景がある。<sup>(1)</sup> こうした状況を更新するためには、阿玉台Ⅰa式から同Ⅳ式までの各段階に伴う浅鉢を把握する必要がある。各段階の浅鉢の比較を通じて阿玉台式土器に伴う浅鉢の系統関係および型式学的特徴を捉えるべきと考える。

## 2. 阿玉台式期の浅鉢の様相

本節では、遺構出土の浅鉢を取り扱う。対象とするのは、

縄文時代中期中葉における浅鉢形土器

阿玉台式土器の分布の中心地域である現在の利根川下流域や霞ヶ浦周辺、利根川上流域や鬼怒川流域周辺とする。対象とする資料は、阿玉台式土器と共伴する浅鉢とし、完形ないし略完形の事例を中心に扱うこととする。切り合い関係や層位関係が認められる資料を念頭に抽出したが、該当する出土事例が少ないため、併せて良好な一括資料が検出された遺構も対象とすることとする。

なお、ここで扱う浅鉢は、便宜上大きく有文と無文に分ける。外面に隆線や角押文などの文様を有するものを有文とし、外面にそういった文様が認められないものを無文として扱う。これらをもとに阿玉台Ⅰa式から同Ⅳ式を「段階」として捉え、各段階に共伴する浅鉢の様相を把握する。

### (1) 阿玉台Ⅰa式土器に共伴する浅鉢

#### ① 層位および共伴関係

当該期は千葉県市原市草刈遺跡C134土坑事例が該当する(第1図1~3)。当該遺構は単独の小竪穴であり他の遺構との切り合いは認められていない。土器は床面から覆土中にかけて出土し、出土土器は阿玉台Ⅰa式段階にまともまっている。当該遺構は阿玉台Ⅰa式に比定される。

#### ② 器形・文様構成・文様要素

3は底部から口縁にかけ緩やかに外に開く平縁の浅鉢で

ある。口縁には粘土棒に帯状の粘土紐をめぐらせたつまみ状の突起が付されており、阿玉台Ⅰa式土器の突起のあり方と共通する。共伴した1や2などの深鉢と同様の突起表現である。突起以外に区画文等の主たる文様構成は有しておらず、角押文等の施文も認められない。また1や2に認められる器面の輪積み痕もなく器面は平滑に整えられている。

当該段階は数量が少なく、現段階では即断できないが、阿玉台Ⅰb式以降の有文、無文といった浅鉢の区分が未分化な状況であった可能性がある。

## (2) 阿玉台Ⅰb式土器に共伴する浅鉢

### ① 層位および共伴関係

当該期は千葉県東金市東・北長山野遺跡59号住居跡(第1図4～9)、柏市中山新田Ⅱ遺跡081号住居跡(同10～17)、茨城県稲敷郡美浦村陸平貝塚5下面貝層(第2図1～6)、群馬県渋川市三原田諏訪上遺跡J-337号土坑(同図7～14)、同三原田遺跡8-G364pit(同図15～17)、栃木県那須郡小川町三輪仲町遺跡SK-584(第5図1・2)が対象である。

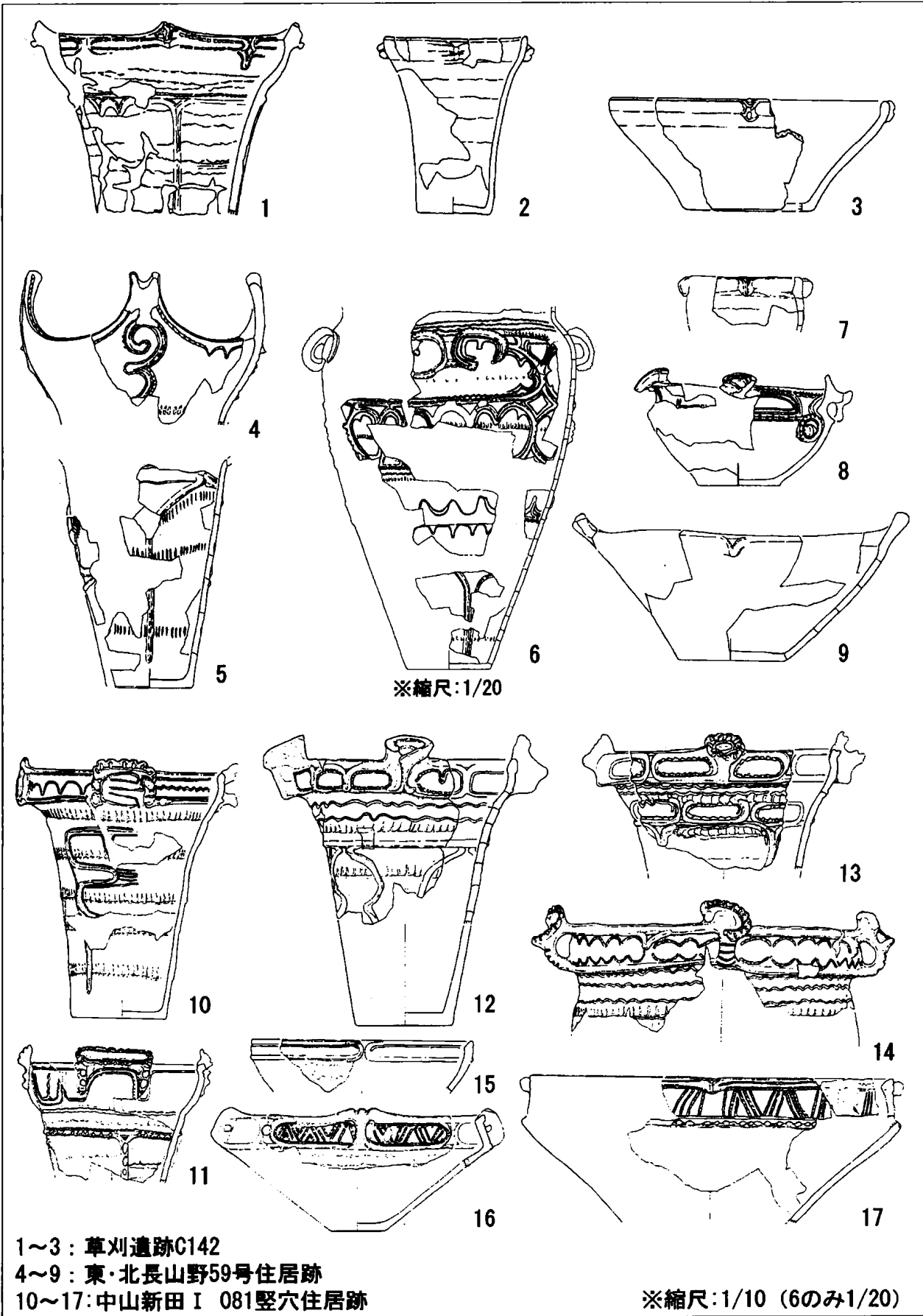
東・北長山野遺跡59号住居跡は円形の有段住居跡であり、同心円状に一回り小さく掘り込み面が検出されている。

掲載土器はその掘り込み面からの出土である。遺物の垂直分布図から土器は覆土中層から上層にまとまり、平面の接合関係は面的に広がっており、遺物の時期も阿玉台Ⅰb式が占める。そのため覆土形成には比較的短時間であることが推測される。

中山新田Ⅰ遺跡081堅穴住居跡は、不正円形で支柱穴が二箇所、炉跡が認められず、阿玉台式期の典型的な住居跡形態といえる。他の住居跡との切り合い関係はない。遺物の垂直分布図はないが「床面直上から上層部まで、極めて多量な遺物が投棄されたような状態で出土」し、「焼土層が3層以上検出」されたと報告されており、覆土形成には段階があると考えねばならない。ただし、出土土器は阿玉台Ⅰb式土器にはほぼ限定され、廃棄の時間幅が阿玉台Ⅰb式期に収まるようである。これまで081号住居跡は、阿玉台Ⅰb式の古段階の事例として扱われている(井出二〇〇五)。

陸平貝塚5層下面出土土器は、「5層に覆われていた土器」である。5層は6層とともに混貝土層であり、土器の出土状況から貝塚形成期は阿玉台Ⅰb式期に比定されている。両層出土土器は略完形土器を含め阿玉台Ⅰb式土器が主体をなして、掲載資料はその5層下面から出土した土器群であり、時間的なまとまりを有していると判断される。

三原田諏訪上遺跡J-337号土坑は円形の土坑であり、223



第1図 阿玉台 I a 式および阿玉台 I b 式段階

号土坑と隣接する。覆土は自然埋没によって形成されており、土器は数個体分が覆土上面にまとまって検出されている。土坑底面からの出土ではないため、土坑と直接的な関係が不明瞭だが、土器は相互に密着した状態で検出されており、一つの単位として捉えられる。

三輪仲町遺跡SK-584出土土器は円形土坑からの出土である。拳大から人頭大の礫と共に検出されている。

## ②器形・文様構成・文様要素

器形は、口縁部から直線的に開くもの（第1図9）、口縁が直立ないし内傾ぎみに立ち上がるもの（第1図16・17、第2図13・14）、口縁が緩やかに内湾するもの（第1図15、第2図6・17）がある。内傾するものは直径が50cmに及ぶ大形の個体があるが、これらの浅鉢は阿玉台Ⅱ式においても認められる。第1図8は鉢形に近い小形の器形である。口縁部は平縁のものが主体を占めるが、小突起を有するもの（第1図9）、波頂がスリットをなす小波状の口縁を有するもの（第1図16）がある。

文様構成は口縁部に隆線で幅狭の区画をつくり、区画内に隆線や角押文で文様を施すものが多い。また口縁部文様が器形の変換点で区画されているものもあり、比較的施文域が明瞭に意識されているといえる。区画内には単列の角押文によって文様が描かれているが、区画内を充填的に施

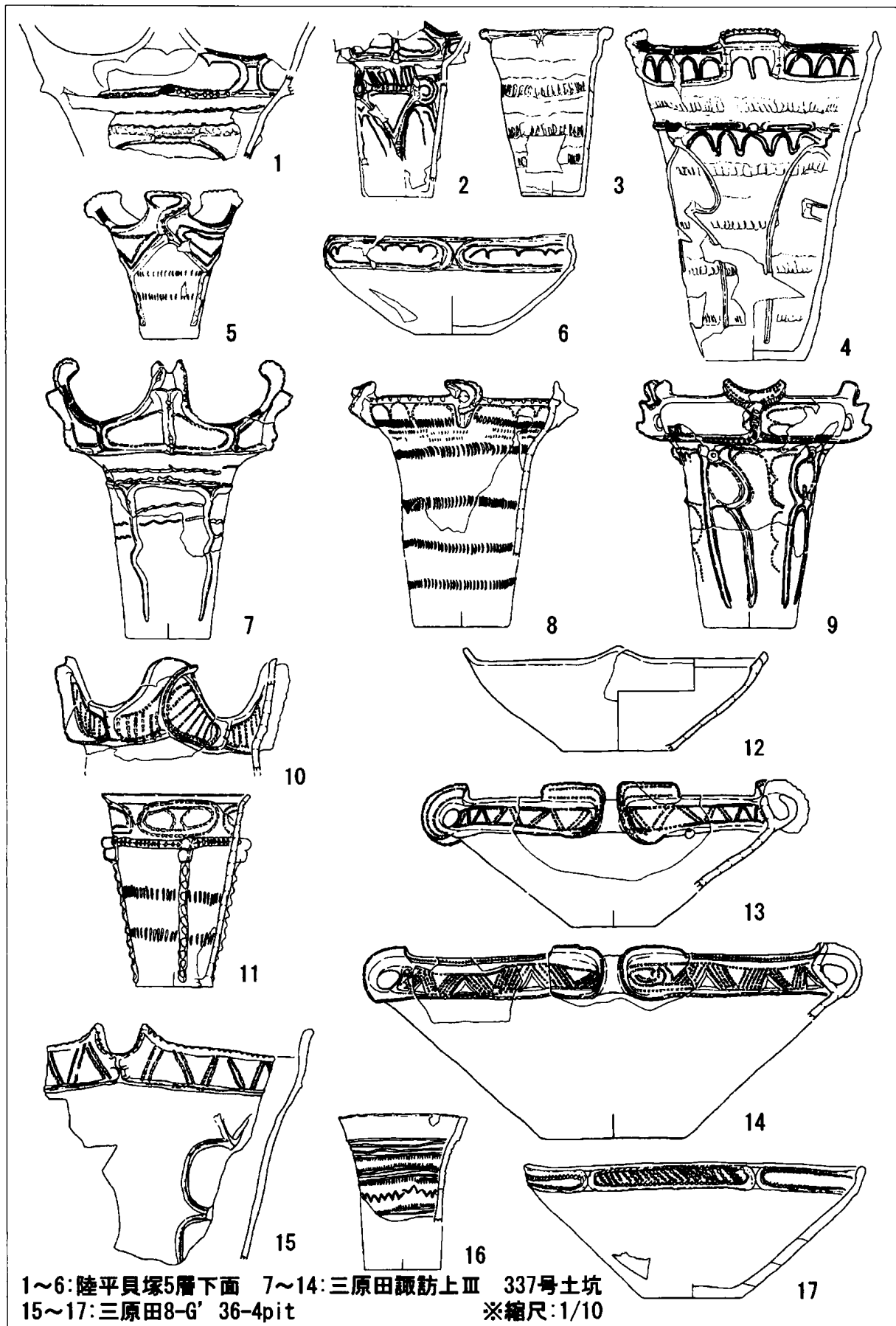
文している固体が目立つ。文様は角押文が隆線脇のみにめぐるもの（第1図15）、隆線脇以外にも角押文が施されるもの（第1図16・17、第2図6・13・14・17）があり、両者が共存するものもある（同17）。後者の文様パターンは深鉢にも共有し、浅鉢のみに限定されるものではないが、後述する阿玉台Ⅱ式段階にも継続していることから、阿玉台Ⅰb式から同Ⅱ式の浅鉢の文様として系統的な関係があることが窺える。

一方、外面に角押文や隆線文が施されない無文の浅鉢も少数存在する。口縁が単位状の小波状を呈するもの（第1図9、第2図12）、内面がやや肥厚する以外は文様がみとめられないもの（第5図2）などがある。

## （3）阿玉台Ⅱ式土器に共伴する浅鉢

### ①層位および共伴関係

当該期は群馬県渋川市房谷戸Ⅰ遺跡21号住居跡（第3図）、茨城県小美玉市石川西遺跡第98号土坑（第4図1・2）、前掲草刈貝塚141号住居跡（同3・5）、千葉県千葉市蔵立遺跡第9号住居跡（同6・9）、同第47号住居跡（同13・18）、前掲三輪仲町遺跡SK-545（同10・12）、同SK-159（第5図14・16）、前掲三原田諏訪上遺跡Ⅱ区175号土坑（同3・4）、同203号土坑（同5・9）、同Ⅰ区323号土坑



1~6: 陸平貝塚5層下面 7~14: 三原田諏訪上Ⅲ 337号土坑  
 15~17: 三原田8-G' 36-4pit ※縮尺: 1/10

第2図 阿玉台 I b式段階

(同10～13)、前掲三原田遺跡7-H29 G pit (第6図1～5)が対象である。事例が多いため、遺構ごとに記載する。

住居跡出土は3事例ある。房谷戸I遺跡21号住居跡は円形の住居跡であり、40～42号土坑が隣接して検出されている。これらの遺構からは阿玉台Ⅱ式土器が多数検出されている。報告者によれば、復元可能な個体は48個を数え、覆土中位からまとまって土器が出土しており、一括的な廃棄であったと推定されている。掲載した第3図をみても、器形や文様構成、文様要素から判断すると、1、2、5に比べ4や6は同列ではなく、より新しい段階にあると考えられる。遺物の垂直分布図が掲載されていないため、当該遺構出土土器はある程度の時間的なまとまりを有する事例として挙げておきたい。

草刈貝塚141堅穴住居跡出土土器は、住居跡下層から中層からの検出であり、床面から浮いた状態での検出である。3は阿玉台Ⅰb式土器であり、図示以外の破片資料も概ね阿玉台Ⅰb式と判断されるが、5は複列の角押文を有しており、阿玉台Ⅱ式段階に比定される。4は他に類例がないため、現状においては並行段階の土器としておく。

蔵立遺跡第9号住居跡は遺物の平面および垂直分布図の掲載はない。記載によれば出土遺物は阿玉台式土器が多く、第4図6と9は「床近く」、7は「覆土」、8は9の

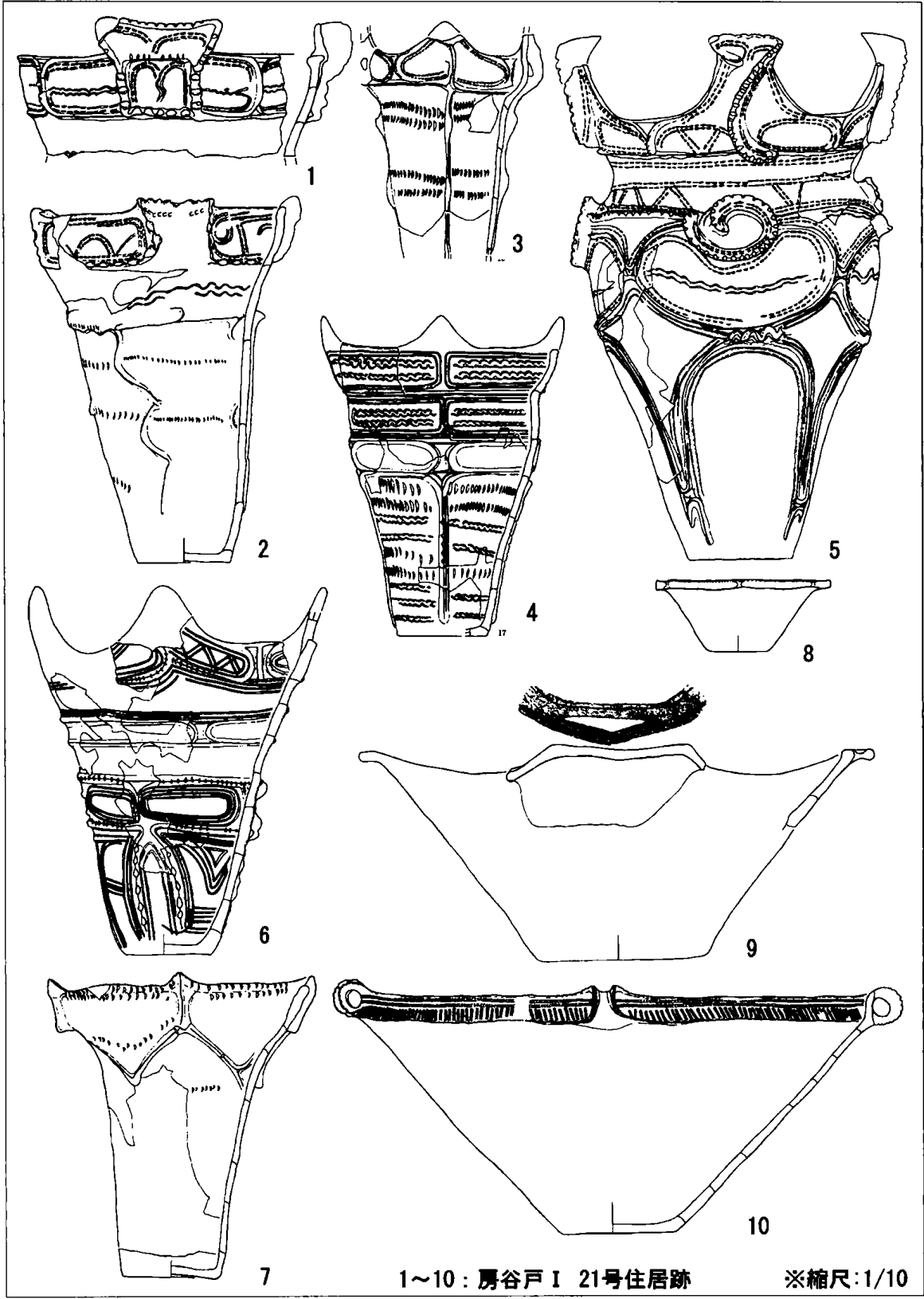
「中に入れられた状態」で検出されている。それらから判断すると、8と9は入れ子状態で検出されたと考えられるため一括性が強く、また6、9は床面近くからの出土であり両者のまとまりも比較的限定できると考えられる。

蔵立遺跡第47号住居跡は遺物の平面分布図がなく、垂直分布図からも直接出土土器の特定はできないが、「住居内で間層を挟んで層位的に区別」でき、「阿玉台式第2群Ⅰ類b種・Ⅱ類・Ⅲ類の区分が遺構内で区分できた」と報告されている。図示した13、14は「覆土下層」、15は「覆土上部」、16～18は「覆土」からの出土であり、13、14は阿玉台Ⅱ式土器、15は阿玉台Ⅲ式土器に比定される。17、18ともに覆土からの検出であり、出土状況から直接特定することは困難だが、土器に施された角押文から阿玉台Ⅱ式土器として挙げておきたい。

次に土坑出土事例をみる。石川西遺跡第98号土坑はフラスコ状土坑であり、1、2はともに覆土中層からの出土である。2は阿玉台Ⅱ式土器に比定される。三輪仲町遺跡SK-545は円形土坑である。10～12はいずれも底面近くから出土している。同SK-159は円形土坑であり、14、16は「底面東部壁際床面直上」より出土した。14は逆位、16は正位の状態出土している。

三原田諏訪上遺跡は3事例がある。Ⅱ区175号土坑は円形





1~10 : 房谷戸 I 21号住居跡 ※縮尺: 1/10

第3図 阿玉台Ⅱ式段階

の土坑であり、3は埋没土上位、4が埋没土下位より出土している。Ⅱ区203号土坑は円形土坑である。5〜9の5個体が埋没土中から出土している。5、6が阿玉台Ⅱ式土器に比定される。7は並行段階か。そのうち、5は角押文がなく隆線とヒダ状の圧痕文のみの施文である。角押文がない点や、本来であれば頸部は施されない楕円状の区画文が認められる点は、阿玉台Ⅰb式土器の範疇から逸脱しているが、ヒダ状の圧痕文は阿玉台Ⅰb式に通有する施文技法である。従属時期の根拠は乏しいが、6との共伴を考慮し、阿玉台Ⅱ式土器としておく。Ⅰ区323号土坑は円形土坑であり、垂直分布図から10、11、13は埋没土の下方から上方にかけて分布する。報告によれば出土した深鉢と浅鉢はいずれも潰れた状態で出土し、10〜13はある程度一括性の高い状態で遺棄されたことが窺える。

三原田遺跡7-E-29G Pitは円形土坑である。覆土は上・中・下と大きく3つに分けられ中層および上層からの出土が多い。1は上層、2と5は下層（2は底面付近）、3と4は中層からの出土である。1は阿玉台Ⅱ式段階の疎文系土器と考えられる（井出二〇〇八）。2は口縁部、頸部、胴部という文様構成が崩れ、胴部には横方向に崩れた蛇行沈線や角押文が施されるなど、典型的な阿玉台Ⅰb式土器からは逸脱する要素が高い。1と同段階もしくは阿玉台Ⅰ

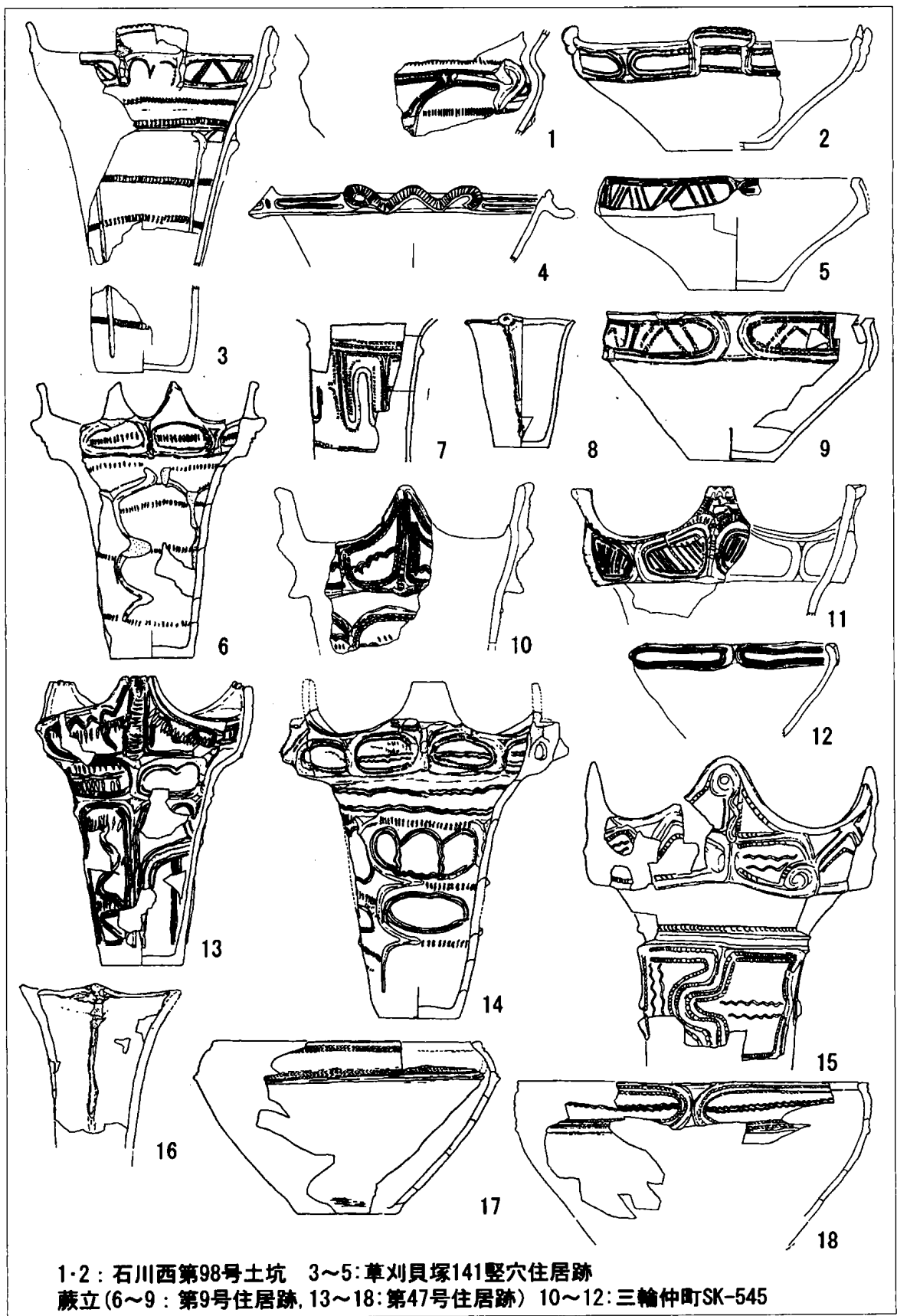
b式Ⅱ式段階の範疇に収まると考える。3、4は新道式併行の勝坂系土器であろう。

## ②器形・文様構成・文様要素

有文の浅鉢の器形は、口縁が直立ないし内傾ぎみに立ち上がるもの（第3図10、第4図2・5）と口縁が緩やかに内湾するもの（第4図9・12・17・18）が主体を占める。後者は内湾の度合いが強いもの（第4図17）が認められる。また阿玉台Ⅰb式段階と比べると内傾の度合いや屈曲部分が緩やかとなっていることが指摘できる。口縁は平縁にほぼ統一されるが、扇状把手が付くものが僅かに認められる<sup>(2)</sup>。

文様構成は、隆線による楕円形の区画を施すもの（第3図8・第4図2・5・9・12・18）が主体となる。房谷戸21号住居跡例のように（第3図10）、隆線の区画によらず、環状の把手が付くものも残る。区画内は複列の角押文が施されるほか、平行沈線文も認められる（第4図18）。

無文の浅鉢は数量が増し大型化する傾向がある。器形は直線的に開くもの（第3図8・9第5図3・8、第6図5）、緩やかに内湾するもの（第5図9・13・16）のほか、内反り気味に外に開くもの（第5図12）がある。口縁は平縁と波状に大きく分かれ、平縁は上端が肥厚し内面に緩やかな稜を有する個体が多い。波状口縁は波頂が平坦もしくは



1・2：石川西第98号土坑 3～5：葦刈貝塚141竖穴住居跡  
 藤立(6～9：第9号住居跡, 13～18：第47号住居跡) 10～12：三輪仲町SK-545

は緩やか凹む。文様構成は波状口縁の浅鉢は口唇に刻みや沈線を施し、波頂に三叉状の陰刻を施すもの、外面波頂付近から隆線によるV字状の貼り付けが施されるものなどが認められる。房谷戸I遺跡21号住居跡例(第3図9)は口唇部に陰刻による三叉文や角押文があり、三原田諏訪上遺跡I区323号土坑例(第5図13)はY字状の隆線の貼り付けが施されるなど、加飾性が認められるが、外面の口縁部区画を有さない点から、現段階では無文の浅鉢の範疇に収めておく。

#### (4) 阿玉台Ⅲ式土器に共伴する浅鉢

前掲三輪仲町遺跡SK-528a(第6図6~12)、栃木県那須塩原市槻沢遺跡SK-74(同13~19)がある。破片資料を含めると他にも事例がある。図示事例を含め、当該段階は阿玉台Ⅲ式土器が主要を占める出土状況ではなく、阿玉台式土器以外の異系統土器と共伴するか、阿玉台Ⅲ式土器自体が客体的な事例となる場合が多いといえる。

#### ①層位および共伴関係

三輪仲町遺跡SK-528aは円形の土坑である。遺物の垂直分布図がないが、報告によれば遺物は大型破片を含め覆土中から散らばって検出されている。6・7は阿玉台Ⅲ式に比定される。いずれも地文に縄文を有し、隆線脇には幅

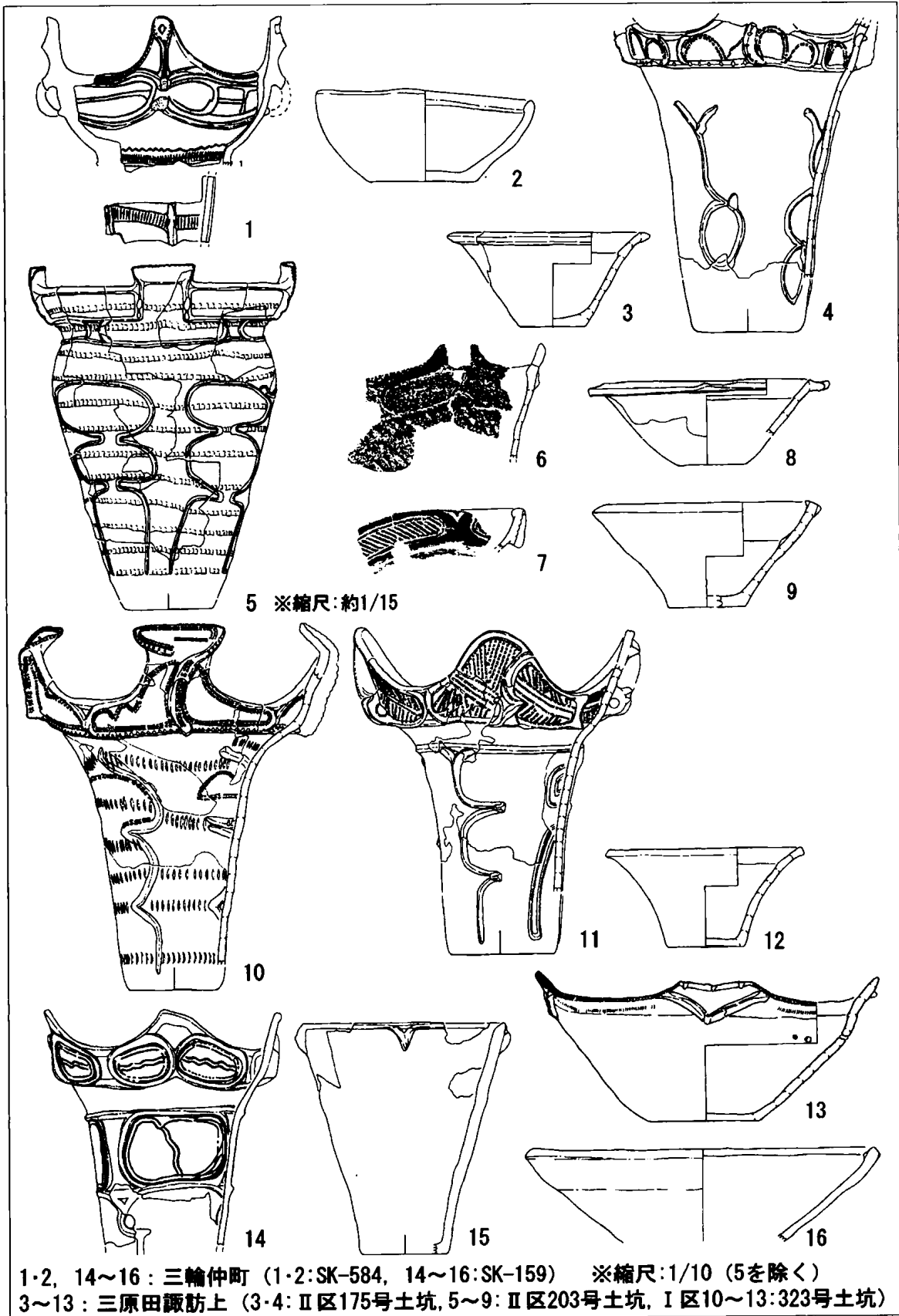
広の角押文が施されている。8~11は大大木8a式併行段階と捉えられる。<sup>③</sup>

槻沢遺跡SK-74は袋状の土坑であり、土坑の開口部から複数個体の土器が出土している。遺物の垂直分布図から土器は中層にまとまっており、19↓16↓14↓18↓17の順に重なっていることが分かる。また垂直分布図には表されていないが、13と15もこれらの土器と密着した状態で出土しており、間接的ではあるがこれらの土器にある程度の一括性が認められるといえる。13は阿玉台Ⅲ式土器、14は阿玉台Ⅲ式並行、17~19は大木式8a式と並行段階の土器に比定される。

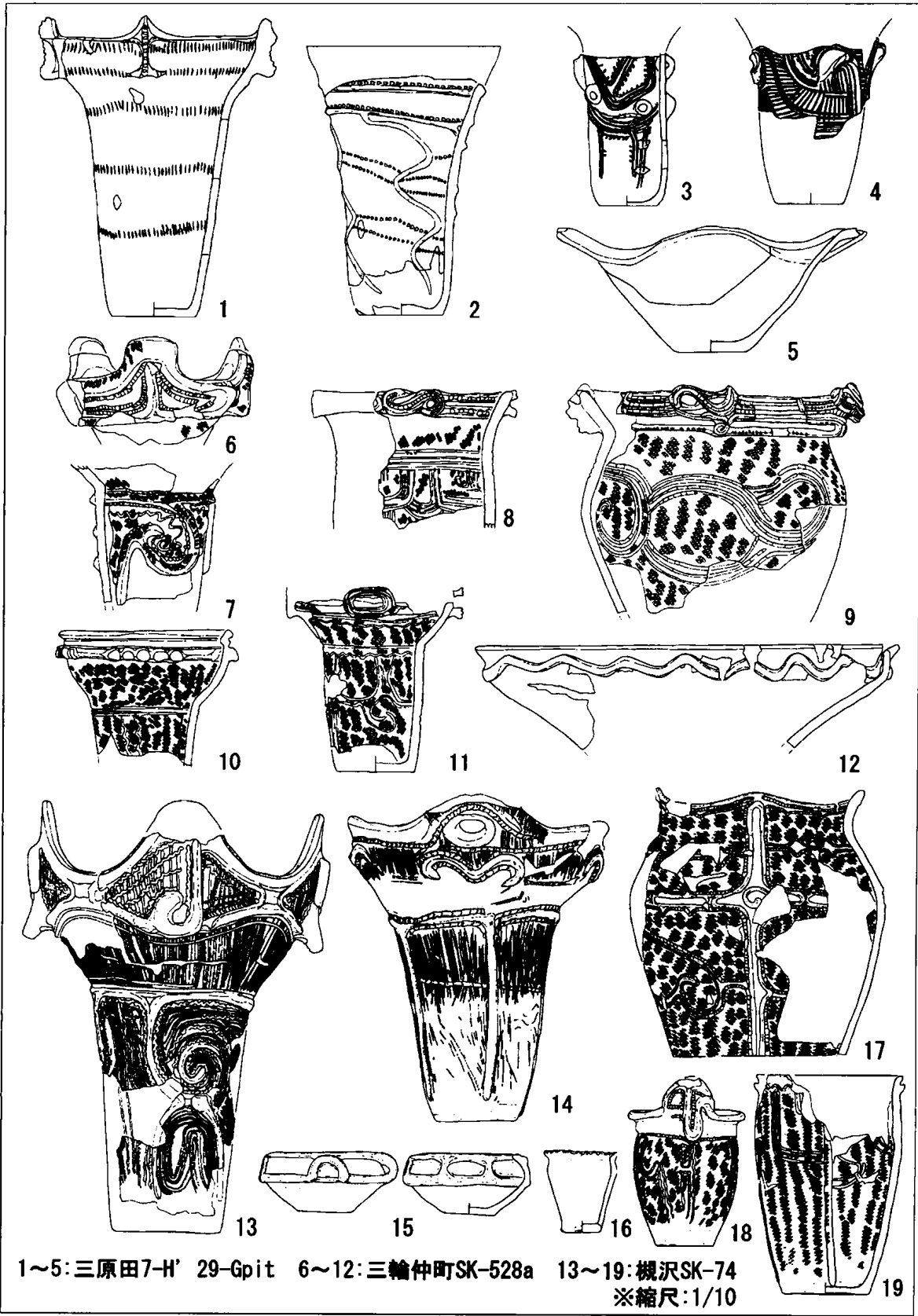
#### ②器形・文様構成・文様要素

器形は口縁が直立し口縁上端で外反するもの(第6図12)と口縁が緩やかに内湾するもの(第6図15)がある。いずれも平縁である。15は小形の浅鉢である。

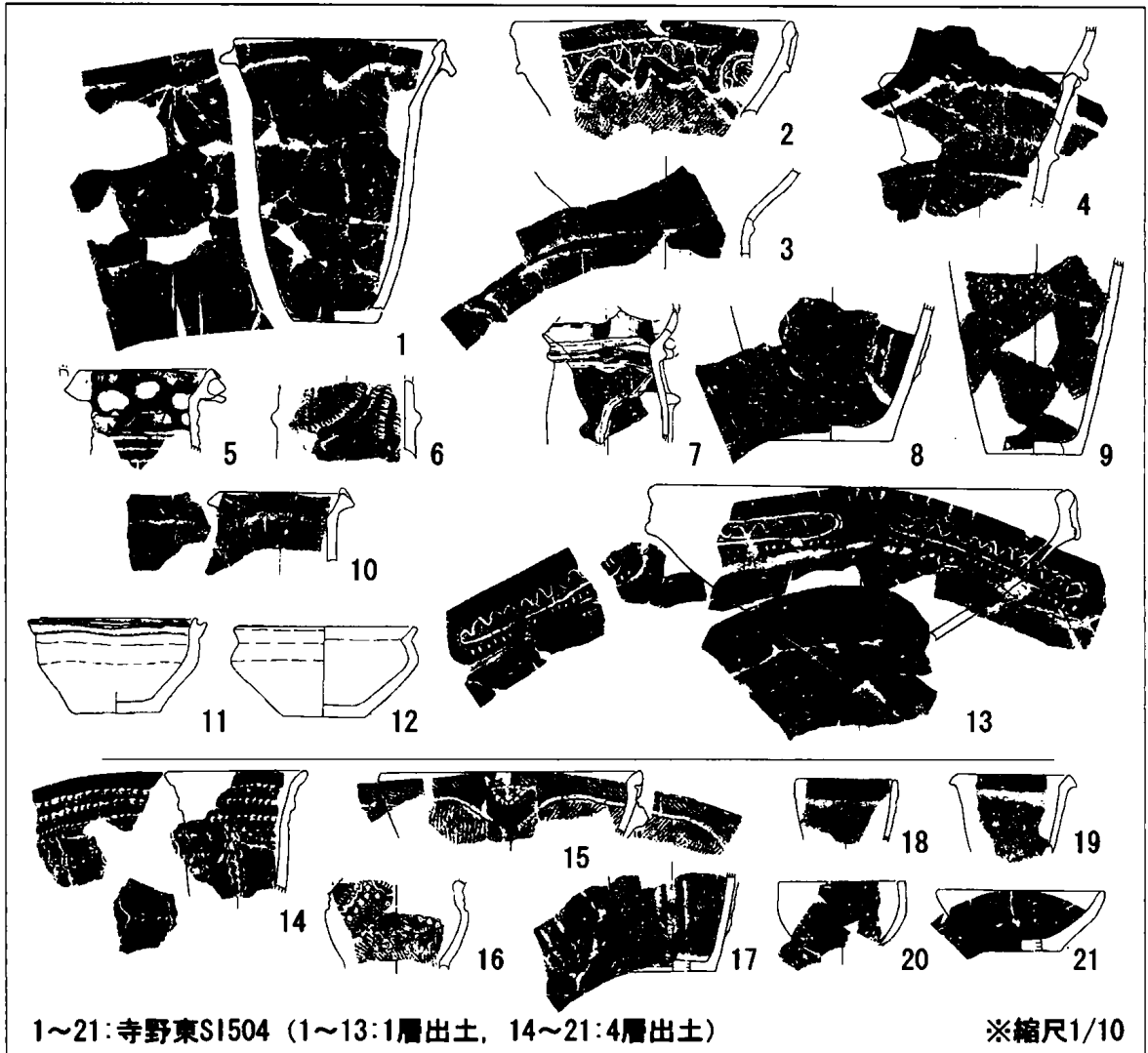
2点とも口縁に粘土紐の貼り付けによる隆線のみのものであり、角押文等は認められない。12は横位に不規則に蛇行する隆線が口縁をめぐる、15は二本の隆線によって口縁部が区画され、区画内はさらに楕円状や弧状に区画されている。三輪仲町遺跡SK-528aおよび槻沢遺跡SK-74においても、当該段階の浅鉢は共伴する深鉢のように地文に縄文や条線文がなく、角押文や沈線文などの文様要素を持



第5図 阿玉台 I b 式および阿玉台 II 式段階



第6図 阿玉台Ⅱ式および阿玉台Ⅲ式段階



第7図 阿玉台Ⅳ式段階

たない点が特徴的であるといえる。

(5) 阿玉台Ⅳ式土器と共伴する浅鉢

寺野東遺跡S I 504 (第7図)、陸平貝塚第10号土坑 (第8図1~4)、根郷貝塚J-5号住居跡 (同5~10) が該当する。阿玉台Ⅲ式段階と同様に阿玉台Ⅳ式土器が主体をなさず、異系統土器と共伴する事例がほとんどである。

① 層位および共伴関係

寺野東遺跡S I 504は「阿玉台Ⅳ式期の特異な住居跡」例として報告されている。重複する遺構はないものの4基の地床炉が検出されている。土層断面図によれば4層ある土層のうち、1層が覆土、4層上面及び4層下地山面までが床面とされる。垂直分布図に対応する土器を1層と4層に区分して掲載したのが第7図である。第7図1~13が1層出土、同14~21が4層出土である。床面である4層からは14や15など幅広の角押文を有する阿玉台Ⅲ式並行の土器とそれに伴う18~21などの小形の無文浅鉢が共伴する。一方、覆土

とした1層からは2や13のように地文に縄文を有し、隆線脇や単独に沈線文が施される土器や、地文が縄文で隆線文のみの土器が多く伴う。浅鉢は10～13が該当する。報告では当該住居跡は阿玉台Ⅳ式期に比定されているが、1層と4層を比較すると、阿玉台Ⅳ式期の時間差として10～13と18～21は区分される可能性がある。

陸平貝塚第10号土坑は楕円形の土坑である。図示した土器はいずれも土坑底面直上から出土している。4の浅鉢は2破片に分かれ、同一面上に60cm離れて検出された。出土状況から1～4は同時期の所産と考えられる。1は阿玉台Ⅳ式土器である。器形、文様構成、文様要素とも典型的な阿玉台Ⅳ式土器と考えられる。2と3は並行する中期中葉～後葉段階の土器と考えられる。

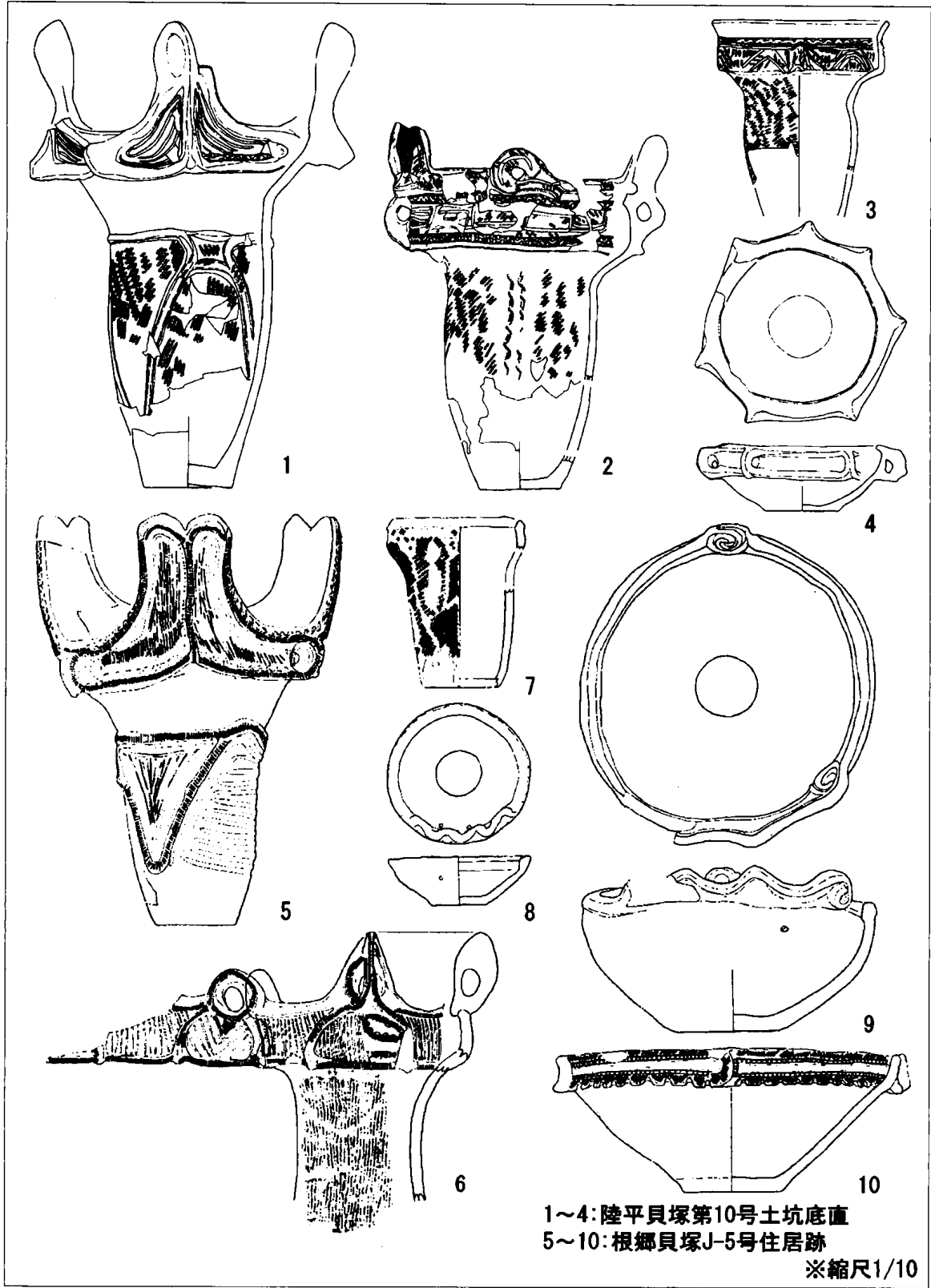
根郷貝塚J-5号住居跡は床面から6体分の人骨が検出されている。浅鉢は9が炉に埋設されていたと報告されているが、それ以外の土器は細かな記載がなされていない。<sup>4)</sup>5は阿玉台Ⅳ式土器並行か。口縁部、頸部、胴部の基本形態は阿玉台Ⅳ式に比定されるものの、隆線上の刻みや環状の把手、胴部の隆線文内の充填的な施文のあり方には変異が認められる。共伴する勝坂Ⅴ式土器の影響を受けた事例と考えられる。当該住居跡は阿玉台Ⅳ式期に属すると考えられるが、共伴土器は勝坂式土器もしくは勝坂式土器の影響を

受けた土器と考えられる。

## ②器形・文様構成・文様要素

当該段階は文様の大別から有文と無文の浅鉢が存在し、また法量から小形の浅鉢を区分することができる。器形は口縁が直立し口縁上端で外反するもの(第7図12、第8図10)と口縁が緩やかに内湾するもの(第7図11・13、20、第8図4・8・9)、口縁が緩やかに開くもの(第7図21)がある。11は口唇が凹線状を呈する。寺野東遺跡SI504例(13)と根郷J-5号住居跡例(10)のように隆線によって口縁部を区画し、区画内には角押文(10)や沈線文(13)がめぐる。13は隆線及び区画内に縄文が施され、10は隆線上のみに縄文が施される。隆線によって口縁部は窓枠状や楕円状に区画されるが、10のように隆線の下端が連続的に波上に凹凸が認められるものがある。一方、角押文や沈線文がなく隆線のみが施される個体もある。陸平貝塚第10号土坑(4)は口縁部に隆線の貼り付けによって7単位の環状把手が付される。器形および隆線の施し方は既述の槻沢遺跡SK-74事例(第6図15)と類似する。根郷貝塚J-5号住居跡における8や9のように口縁上方に波上の隆線文は既述の三輪仲町遺跡SK-528a事例と直接的に繋がるかは即断できないが、同様技法による装飾のあり方は注目される。ただし、根郷事例の場合は、8、9と10との





第8図 阿玉台IV式段階

間に型式学的な開きがあり、両者の系統関係が不明確であるといえる。現段階では、8と9は並行段階の浅鉢と捉えておきたい。

なお、寺野東SI504事例においては、小形の無文浅鉢が多く検出されている。掲載事例が本例のみのため、当該段階に共通する特徴と捉えるには早急だが、小形の浅鉢が増える兆候を示している可能性がある。

### 3. 阿玉台式土器に伴う浅鉢の様相

#### (1) 各段階の様相

阿玉台Ia式段階は器形としての浅鉢が未分化な状況にあるといえる。器形は共伴する深鉢に近い。口縁部文様は突起表現が共通するが、角押文は施されていない。一方深鉢に輪積み痕が施されるのに対し、浅鉢は概して平滑に器面が整えられている。器面の調整は阿玉台Ib式以降も同傾向にあるといえる。

阿玉台Ib式段階は、浅鉢が大きく有文と無文に分岐する段階と考えられる。有文浅鉢は隆線によって口縁部に明瞭な区画文が発生し、区画内に角押文が施される。有文浅鉢の文様要素ならびに文様構成は同段階の深鉢に共通し、隆線脇に単列の角押文がめぐり、区画内に単独の角押文に

よって文様が描かれている。区画内を鋸歯状に描く文様構成が比較的多く認められること、また角押文が充填的に施文されることが特徴的であるといえる。大形の器形が現れることも特徴であろう。対照的に、無文浅鉢は区画や角押文が施されず、口縁上端の単位突起やV字状の突起表現などが主な文様であるといえる。

阿玉台II式段階は阿玉台Ib式段階の有文および無文の諸形態が継続、発展する段階である。有文浅鉢は口縁が緩やかに内湾する器形が多くなり、隆線による楕円形の区画文と区画内の複列の角押文による文様が定型化する。区画内は前段階同様に鋸歯状や、充填的に文様が描かれる個体が多い。大形の個体も引き続き認められる。無文の浅鉢は口縁が波状、平縁を呈する個体が認められる。当該段階になると、無文の浅鉢バリエーションも増え、土坑出土の事例が多く目立つ。口唇や内面に刻みや角押文が施される個体もあり、外面にも隆線が付される場合がある。

阿玉台III式段階は事例が少なく現状を概観するにとどめたいが、阿玉台II式段階まで継続した口縁部文様を有する有文浅鉢の存在が希薄になり、かわって隆線のみが付される浅鉢や無文浅鉢が主体となることが予想される。これらの浅鉢は有文の浅鉢からの系統か、無文の浅鉢からの系統か注意深く吟味する必要がある。

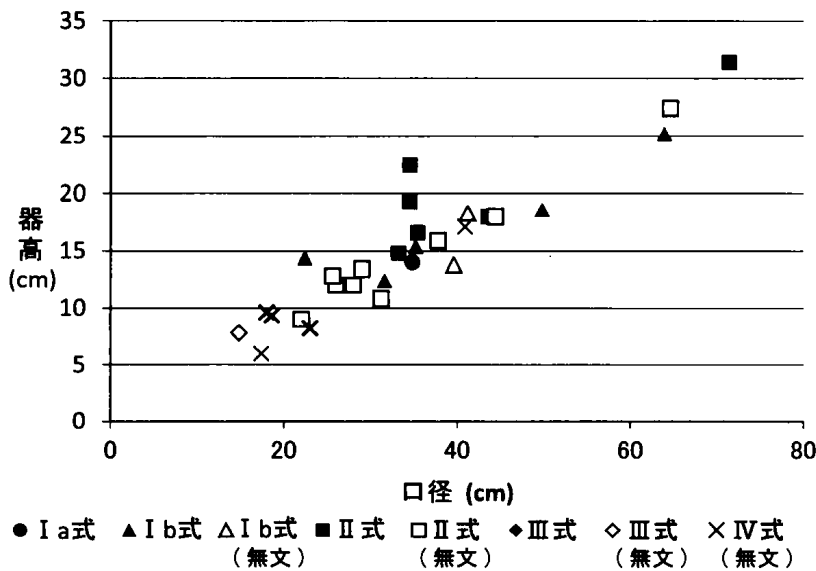
阿玉台IV式段階も阿玉台III式段階同様に事例が多くはない。阿玉台III式段階において希薄であった口縁区画と角押文による有文浅鉢が認められる。口縁部にのみ縄文が施されるが胴部以下は無文である。また、隆線文のみの浅鉢も存在し、阿玉台III式段階からの系統関係を推定できる個体が存在する。

## (2) 口径と器高の相関関係について

第9図は本稿で扱った浅鉢の口径と器高の相関図である。本稿で掲載した浅鉢のうち、復元を含め底部まで残存しているものを対象に、口径と器高を報告書の記載もしくは報告書の実測図から計測した。第9図をみると、まず浅鉢の口径と器高が正の比例関係にあることが分かる。これは阿玉台式土器に伴う各段階の浅鉢が法量において一定の対応関係を有していることを示している。次に各段階の関係をみると、阿玉台I b式段階は、一定の大きさに集中せず、さまざまな大きさが認められる。用途や場面に応じた作り分けが存在したことが想定されよう。また阿玉台II式段階になると、有文、無文それぞれにまとまりが存在することになる。特に無文の浅鉢に有機的なまとまりが認められる。口径30 cm前後、器高12 cm前後の個体が多い。同様の傾向は阿玉台IV式段階にも認められ、口径が20 cm前後、器高

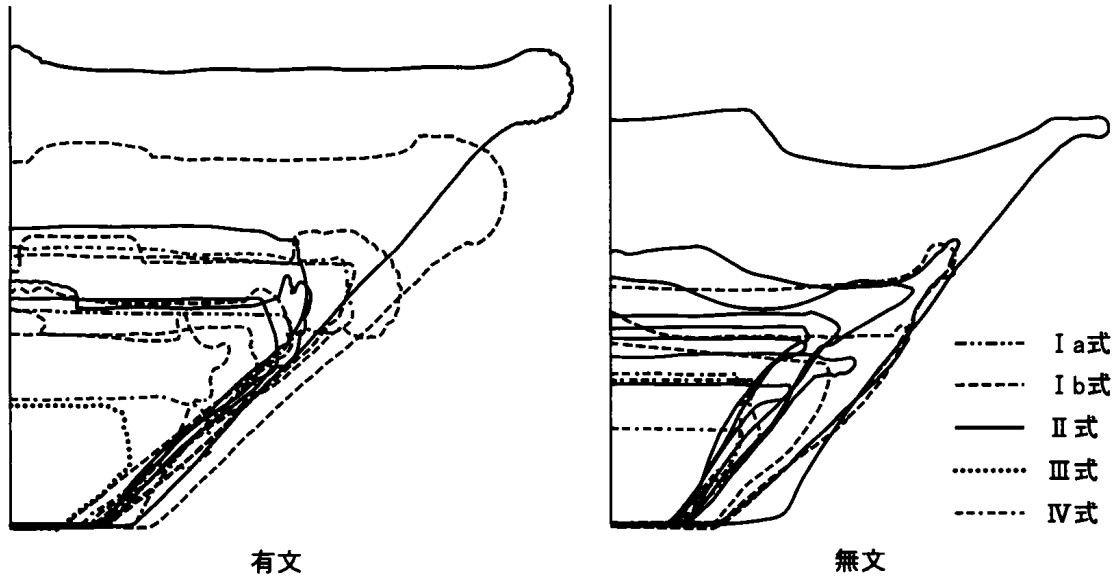
が5～10 cmにまとまりが認められる。このように無文浅鉢においては、法量の相関関係にピークがあることが想定され、当時の社会における浅鉢の消費のあり方の一端が示されているといえる。

一方、口径が50 cmを超え、器高が25 cmに及ぶ大形の浅鉢の存在が注目される。これらは今のところ、阿玉台I b式



第9図 浅鉢の口径と器高

段階および同II式段階に認められ、極めて特異なあり方を示していることが看取される。これらの浅鉢の数量、数値的特徴から、そういった浅鉢の使用場面が日常的であるというよりは、特定の使用場面の下で用い



第10図 浅鉢の外形比較

られたと考えたい。事例および出土状況の詳細な分析を進める必要がある。

### (3) 外形の比較

第10図は、第9図で対象とした浅鉢の外形を重ね合わせたものである。第9図では口径と高さの数値的關係であったが、第10図を見ると各段階の有文ならびに無文浅鉢における具体的な器形の対応關係が把握できる。有文、無文とも、第9図で示した比例關係がそのまま器形に反映されていることが分かる。特に有文の浅鉢は相似に近い形で法量が推移しており、浅鉢の形そのものの共通性が重視されていたことが分かる。一方、口縁部裝飾のうち、有文の浅鉢は隆線による突起や把手にバリエーションが認められ、無文の浅鉢は口縁部形態にバリエーションがあることが分かる。このことは、有文と無文の浅鉢にそれぞれの系統的な連続性が存在し、独自の作りわけが存在していたことが想定される。

### まとめ

本稿では阿玉台土器に伴う浅鉢を中心に、当該期の浅鉢の様相を整理した。これによって、阿玉台Ia式から同IV

式における共伴事例を捉えることができた。資料的制約から阿玉台Ⅲ式以降についてはデータの蓄積ならびに更新の必要があるが、阿玉台式土器に伴う有文、無文浅鉢の実態を探る端緒とすることができたと考える。

冒頭に示したように、これまで縄文時代中期中葉土器群の編年整理や地域史研究の中で、浅鉢は必ずしも十分な研究がなされぬまま現代に至っている。その背景には、浅鉢が深鉢に比べ土器型式をまたぐ広範な分布を示し、また変遷の速度が深鉢と一致しない場合が多く、変化の方向性を見出しにくいという浅鉢の特性があるように思われる。本稿においても、従来からの指摘に洩れず、阿玉台Ⅲ式以降の様相を十分提示することが困難であった。しかしながら、深鉢とは異なるこのような特性は、裏を返せば深鉢とは異なる土器製作ならびに土器の流通に由来することを暗示していよう。これまでの深鉢の研究成果を援用する形で浅鉢の分析を進めることによって、より具体的な縄文社会の集団交渉のあり方に迫ることが可能になると考える。

なお、本研究は科学研究費助成事業「浅鉢形土器の型式学的検討を通じた縄文社会構造の研究」(若手研究(B)・研究課題番号 24720364、研究代表者：井出浩正)の成果の一部である。

## 註

(1) 阿玉台式土器に伴う浅鉢として『日本原始美術』(縄文式土器)において中期を担当した江坂輝弥が蛇崩遺跡出土の浅鉢を阿玉台Ⅱ式土器として掲載している。また、その後の集成本では『縄文土器大観』(中期1)において「阿玉台式土器様式」を担当した谷井彪が当該土器の編年に浅鉢を加えている。しかしながらこうした例は少なく、土器集成を目的とする辞典類においても記載されていない場合がほとんどである。

(2) 扇状把手の付く浅鉢は、長野県油田遺跡出土の阿玉台Ⅰb式に比定される浅鉢が類例として挙げられる。そのためこの種の浅鉢は阿玉台Ⅰb式段階から認められると考えられるが、総体的に数量は少ないことが予想される。

(3) 近年下総考古学会によって積極的に整理されている。詳しくは『下総考古学』22号を参照されたい。

(4) 『鎌ヶ谷市史』における根郷貝塚J-5号住居跡の炉に埋設された土器は本稿第8図9の浅鉢となっているが、『鎌ヶ谷市史研究』(第8号)所収の犬塚論文においては本稿第8図10が炉の埋設土器として図示されている。『千葉県の歴史』(資料編 考古1〈旧石器縄文時代〉)は記載がないが、『鎌ヶ谷市史資料編Ⅰ(考古)』においても同10が埋設土器とされており記載に相違が認められる。

## 引用・参考文献

### 【論文等】

- 井出浩正 二〇〇五「縄文時代中期前半阿玉台Ⅰb式土器研究の現状—Ⅰb式土器の細分に関する学史的見解の整理と展望—」『駒澤考古』(第30号) 駒澤大学考古学研究室
- 井出浩正 二〇〇八「常総における阿玉台Ⅱ式土器の様相」『生産の考古学Ⅱ』同成社
- 井出浩正 二〇一二「長野県内における阿玉台式土器の様相—群馬県西部の阿玉台式土器との比較から—」『長野県考古学会誌』(143・144合併号) 長野県考古学会
- 犬塚俊雄 一九八二「(3)根郷貝塚」『鎌ヶ谷市史』(上巻) 鎌ヶ谷市
- 犬塚俊雄 一九九五「根郷貝塚第一次調査人骨の出土状態について」『鎌ヶ谷市史』(第8号)
- 犬塚俊雄 二〇〇〇「146 根郷貝塚」『千葉県の歴史 資料編』(考古1旧石器・縄文時代) 千葉県
- 犬塚俊雄 二〇一〇「11 根郷貝塚」『鎌ヶ谷市史資料編Ⅰ(考古)』鎌ヶ谷市
- 江坂輝弥 一九六四「Ⅲ 中期の土器」『縄文式土器』(日本原始美術1) 講談社
- 大村 裕 一九九一「型式細分の方法に関する一つの試み—埼玉県飯能市・堂前遺跡第2次調査1号住居址出土土器の分析を中心に—」『下総考古学』(12) 下総考古学研究会
- 岡崎文喜・石井 穂 一九八二「遺跡研究論集Ⅱ — 藤立遺跡を中心とした縄文時代中期初頭集落址の研究—」遺跡研究会
- 金井正三 一九七九「縄文前期浅鉢形土器について」『信濃』(第31巻第4号) 信濃史学会
- 小林謙一 二〇一一「第5章 土器の折衷—勝坂式と阿玉台式—」『異系統土器の出会い』同成社
- 小山 勲 一九九一「阿玉台式土器における層位資料の検討—勝坂式土器との共伴事例を中心に—」『下総考古学』(12) 下総考古学研究会
- 佐藤雅一 二〇〇一「信濃川中流域の浅鉢形土器について—縄文時代中期浅鉢形土器の基礎的研究—」『新潟考古』(12号) 新潟県考古学会
- 下総考古学研究会 一九八五「特集 勝坂式土器の研究」『下総考古学』(8) 下総考古学研究会
- 下総考古学研究会 二〇〇四「(特集) 房総半島における勝坂式土器の研究」『下総考古学』(18) 下総考古学研究会
- 下総考古学研究会 二〇一一「(特集) 房総半島および周辺地域における大木諸型式(7b式、8b式)の研究」『下総考古学』(22)
- 末木 健 一九七九「縄文時代中期浅鉢形土器研究序論」『奈和』(第17号) 奈和同人会
- 鈴木保彦 一九八一「阿玉台式土器」『縄文土器大成』(2—中期) 講談社
- 鈴木徳雄 二〇〇八「浅鉢」『総覧 縄文土器』『総覧 縄文土器』刊行委員会
- 建石 徹・井出浩正・合田久美子 二〇〇九「所謂『七郎内Ⅱ群土器』研究における現状と課題」『下総考古学』(21) 下総考古学研究会
- 谷井 彪 一九八五「阿玉台式土器からみた東北南部大木式の

変遷」『古代』（第80号）早稲田大学考古学会

谷井 彪 一九八八「阿玉台式土器様式」『縄文土器大観』（2  
中期1）小学館

塚本師也 一九九〇「北関東・南東北における中期前半の土器  
様相」『古代』（第89号）早稲田大学考古学会

塚本師也 二〇〇三「茨城県北部域に於ける縄文時代中期中葉  
の土器の様相―宮後遺跡の調査成果から―」『領域の研究』

塚本師也 二〇〇六「田木谷遺跡出土の縄文時代中期中葉の土  
器について（2）―霞ヶ浦北岸における中期中葉の土器様相  
―」『玉里村立史料館報』（Vol.11）玉里村立史料館

塚本師也 二〇〇八「阿玉台式土器」『総覧 縄文土器』『総覧  
縄文土器』刊行委員会

土肥 孝 二〇〇九「恩名沖原遺跡出土の浅鉢形土器につい  
て」『地域と学史の考古学』六一書房

中山真治 二〇〇五「縄文時代中期の彩色された浅鉢について  
の覚え書き―関東地方西南部の中期資料を中心に―」『東京  
考古』（23号）東京考古談話会

中山真治 二〇〇七「縄文時代中期の小規模集落―矢川・野川  
上流域の中期初頭・前半集落を例に―」『セツルメント研究』  
（6号）セツルメント研究会

西村正衛 一九七二「阿玉台式土器編年の研究の概要―利根川  
下流域を中心として―」『文学研究科紀要』（第18輯）

西村正衛 一九八四「19.阿玉台式土器の編年」『石器時代に於  
ける利根川下流域の研究―貝塚を中心として―』早稲田大学  
出版部

出版部

日沖剛史 二〇〇七「縄文時代中期前半の土器分類―三原田諏  
訪上遺跡出土遺物の再検討―」『上毛野の考古学』群馬考古  
学ネットワーク

細田 勝 一九九六「阿玉台式土器」『日本土器事典』雄山閣  
松島榮治・山口逸弘 二〇〇六「赤彩浅鉢について―孺恋村今  
井東平遺跡の資料から―」『研究紀要』（24）（財）群馬県埋蔵文  
化財調査事業団

松田光太郎 一九九八「東関東における縄文前期後半の浅鉢形  
土器に関する考察―浮島・興津式土器に関する浅鉢形土器を  
対象として―」『神奈川考古』（第34号）神奈川考古同人会

村田文夫 一九九六「縄文前期浅鉢形土器出現期の様相―古東  
京湾地域における若干の資料から―」『考古学の諸相』坂詰  
秀一先生還暦記念会

山口逸弘 一九八八「新巻遺跡出土の土器について」『群馬の  
考古学』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

山口逸弘 一九九二「新道系土器群の変容過程―利根川上流域  
を中心にして―」『研究紀要』（9）（財）群馬県埋蔵文化財調査  
事業団

山口逸弘 一九九九「土壙出土土器の選択性―中期土壙の2個  
体の共伴例から―」『縄文土器論集』縄文セミナーの会

山口逸弘 二〇〇〇「浅鉢形土器との対話―赤城山西麓の縄文  
時代中期中葉資料から―」『赤城村歴史資料館紀要』（第2  
集）赤城村歴史資料館

山内清男 一九六四「Ⅱ 縄文土器の製作と用途」『縄文式土  
器』（日本原始美術Ⅰ）講談社

山内清男 一九六四「Ⅱ 縄文土器の製作と用途」『縄文式土  
器』（日本原始美術Ⅰ）講談社

山内清男 一九六四「Ⅱ 縄文土器の製作と用途」『縄文式土  
器』（日本原始美術Ⅰ）講談社

山内清男 一九六四「Ⅱ 縄文土器の製作と用途」『縄文式土  
器』（日本原始美術Ⅰ）講談社

【発掘調査報告書等】

上三川町教育委員会 二〇〇四『島田遺跡Ⅲ』上三川町教育委員会

群馬県企業局 一九九〇『三原田遺跡』（第2巻〈中期前半期〉後期初頭期篇）

群馬県勢多郡赤城村教育委員会 二〇〇五『三原田諏訪上遺跡Ⅲ—縄文時代中期編—』（赤城村埋蔵文化財発掘調査報告書第36集）群馬県勢多郡赤城村教育委員会

茨城県教育財団 二〇〇九『石川西遺跡』（茨城県教育財団文化財調査報告第321集）茨城県

群馬県埋蔵文化財調査事業団 一九八九『房谷戸遺跡Ⅰ』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告第95集）群馬県教育委員会

千葉県文化財センター 一九八六『元割・聖人塚・中山新田』（常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅱ）日本道路公団 東京第一道路局

千葉県文化財センター 一九九〇『市原市草刈貝塚』（千葉県文化財センター調査報告第171集）千葉県急行電鉄株式会社

千葉県文化財センター 二〇〇三『千原台ニュータウンⅧ—市原市草刈遺跡（東部地区縄文時代）—』（千葉県文化財センター調査報告第448集）都市基盤整備公団

栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター 一九九二『品川台遺跡』（栃木県埋蔵文化財調査報告書第128集）栃木県教育委員会

栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター 一九九四『三輪仲町遺跡』（栃木県埋蔵文化財調査報告書第143集）栃木県教育委員会

栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター 一九九六『槻沢遺跡Ⅲ』（栃木県埋蔵文化財調査報告書第171集）栃木県教育委員会

栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター 一九九七『浄法寺遺跡』（栃木県埋蔵文化財調査報告書第196集）栃木県教育委員会

とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター 二〇〇〇『御霊前遺跡Ⅰ』（栃木県埋蔵文化財調査報告書第236集）栃木県教育委員会

とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター 二〇〇一『寺野東遺跡Ⅲ』（栃木県埋蔵文化財調査報告書第250集）栃木県教育委員会

とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター 二〇〇六『内遺跡』（栃木県埋蔵文化財調査報告書第296集）栃木県教育委員会

とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター 二〇〇八『小鍋前遺跡』（栃木県埋蔵文化財調査報告書第313集）栃木県教育委員会

美浦村教育委員会 二〇〇四『陸平貝塚』（陸平研究所叢書1）美浦村教育委員会

北長山野遺跡調査会 一九九〇『東・北長山野遺跡』横芝町教育委員会